



ホットニュース Hot News

◎こどもしつのお仕事紹介「おはなし会」

秋が来て、こどもしつはてんてこ舞い！なぜだかわかりますか？

学校やこども園へ、おはなし会に出かけるからです。

小さな子たちには、大型絵本や紙芝居などを使って読み聞かせ。楽しんでもらえるよう、途中で手遊びや歌を挟みます。

大きい子たちには、テーマに沿っておすすめ本を紹介する「ブックトーク」を行います。面白くても手に取られていない本を発掘したり、文章で伝わりづらい所は、写真で紹介したりと、工夫を凝らします。

こどもしつのはたらきは、皆さんの反応が良いと「頑張ってるよ」と、ほっと胸をなでおろします。

皆さんも「読書の秋」を楽しんでくださいね！



▲学校でのおはなし会



集まる場所が必要だ

エリック・クリネンバーグ/著 英治出版

災害などでインフラが破綻した時に生死を分ける要因は、あらゆる人が集まれる学校や図書館など社会的インフラの有無だった。



シマエナガさんの12か月

山本光一・河瀬幸・三浦大輔/著 河出書房新社

首を傾げた姿がとても愛らしいシマエナガ。そんなシマエナガの四季折々の暮らしぶりを追った本です。

History Inquiry Club 眞の226 歴史探訪クラブ

文化財課(博物館) ☎22-1720
 吉胡貝塚資料館 ☎22-8060
 渥美郷土資料館 ☎33-1127



博物館HP



博物館Instagram

冬の風物詩「ダイコンのはざ掛け」

渥美半島で、たくあん漬の生産が始まったのは、大正の中期頃で、市内保美町官林地区で農家の冬の副業として、瀬古(※)により始められたとされます。

渥美半島の酸性の土壌はダイコンの生産に適しており、栽培期間も短く、冬に吹きつける特有の季節風が適度にダイコンを乾燥させ、たくあんの生産に最適の条件を備えていました。

9月中旬には種、11月から1月に収穫され、収穫後は、はざに2週間ほど干して乾燥させ、



▲渥美半島冬の風物詩 ダイコンのはざ掛け (昭和30年代、個人蔵)

四斗樽に漬け込まれました。

昭和12(1937)年、日中戦争が始まると漬物は、粗食に耐える必需食料品として生産が増加されます。

こうした中、個人でも漬物業が行われるようになりました。これが業者漬の始まりです。この頃から大きな樽(ロク)による大規模漬も始まりました。

戦後には、渥美郡漬物協会が設立され、たくあんの生産は安定し、昭和30年代になると、漬物業界はさらなる成長を遂げます。ダイコンの作付面積は急増し、農家の重要な収入源となりました。昭和34(1959)年には、質の良い原料を入手するため、渥美郡園芸販売農業協同組合連合会主催の生ダイコンのセリ市が始まります。その後は液漬たくあんなどの開発もあり、渥美たくあんの名が全国に鳴り響きました。

そんな一世を風靡した渥美たくあんも、時代とともに減少し、ダイコンの作付けは昭和40年代中頃をピークに減り続けました。それに伴い、渥美半島の冬の風物詩だった「ダイコンのはざ掛け」風景も、平成の時代には、ほとんど見られなくなってしまいました。

※地域の小単位(世帯)による生活共同体のこと。(学芸員 天野敏規)